

続きまして関西大学社会安全学部 准教授 菅 磨志保より「ボランティアの課題」について報告いたします。

菅磨志保

今、左の画面にご覧頂いている写真は、阪神・淡路大震災の時のボランティア達です。ライフラインが止まり、自分達の衣食住の確保もままならない状態の中で公園にテントなどを張って活動していました。

実際、災害ボランティアと言うと、寝袋を担いで、肉体労働をして、と言うイメージが強いと思いますが、他の日常のボランティア活動との違いを考えてみますと、福祉のボランティア、青少年育成ボランティアなど様々な活動があり、それぞれの分野で、特定の対象に対して活動していますが、災害ボランティアの場合は、いままで接点のなかった知らない地域に入って、初めて出会った人々が、互いに支援するー支援されるという関係を取り結ぶという点、しかもそれが大量に行われていくと言う点が大きな特徴だと思います。

「ボランティア元年」と言われた阪神・淡路大震災では、2か月間に100万人の人達が被災地で活動しました。当時、暗いニュースが多い中で、日本国中の熱い視線が注がれました。これまでも大変厳しい状況が報告されてきましたが、このボランティアの活動に、今回も希望を託せたらと思っています。

現場での肉体労働のイメージが強い災害ボランティアの活動ですが、実際の活動はそれだけではありません。ボランティアにしか出来ないことが沢山あります。支援者としてのボランティアは、被災者の一番近くにいる存在です。何もしなくても、できなくても被災者の傍に立って、寄り添えるのもボランティアです。精神的にも辛い状態に置かれている被災者にとって、まったく見ず知らずの人が傍らに寄り添って支援をしてくれる。背中を押して希望や勇気を持たせてくれる。こう言ったボランティアにしか出来ないこともあります。

しかし、一方で善意による支援は様々な問題も孕んでいます。実際、良かれと思って行ったことが、結果的には被災者の為にならなかったことも沢山ありました。例えば炊出し活動です。無償の炊出しは、再開し始めたお店の営業妨害になってしまう。あるいは避難所で不自由な生活をしているおじいちゃん、おばあちゃん達に至れり尽くせりの支援をしていたら、避難所から家に戻る時になって自分のことができなくなり、自立した生活が出来なくなってしまう。そんな事例もありました。こうしたボランティア活動をめぐる様々な問題は、16年前の阪神・淡路大震災以降、関係者の努力によって、少しずつ改善され、善意を生かした仕組みが作られて来ました。

そのひとつが「災害ボランティアセンター」です。みなさんも、テレビなど

で大勢のボランティアが被災地で活動しているのをご覧になったことがあるかと思いますが、このように、初めて活動する人達が、見ず知らずの地域に入っ
て、被災者の役に立つためには、善意を力にしていく仕組みが必要です。阪神・
淡路大震災の時も、大勢のボランティアが被災地に駆けつけて行ったわけですが、自治体の職員も被災していて、ボランティアの活動をコーディネートすることが出来ませんでした。そうした状況の中で、ボランティア自身が、自分で自分の活動を選択し、判断して活動していくという災害版のボランティアコーディネート
の仕組みを創り出しました。その仕組みは、災害ごとに改善が加えられ、現在に至っています。

このように、災害が発生したら、災害ボランティアセンターを立ち上げて活動をしていくことになるのですが、単にボランティアセンターの仕組みを動かせばよいわけではありません。被災者に向き合う「マインド」も重要です。仕組みとマインド、この両方がなければ災害時のボランティア活動は上手くいきません。しかし、一旦仕組みを作ってしまうと、どうしても、それを効率的、効果的に動かしていくことを考えてしまいがちですが、そうしているうちに、活動がルーティン化してしまうことも少なくありません。本当に被災者に必要な活動が出来ているのか、ということ常々チェックして、仕組みを動かしていくことが求められます。被災者の立場に立って考えることが求められるのです。

では、今回の東日本大震災後の支援活動がどのように行われてきたのかをご紹介しますが、いまだに活動を阻む様々な障害があります。今までの先生方の発表の中でも度々触れられてきましたが、そもそも現地にいけない、安全な環境が確保できない、広域に亘って被災しているため、活動に必要な資源を補給するルートも寸断されている。更に通信網が途絶していて情報が得られない。このような「ない・ない・ない」の状況で、しかし、支援を必要としている・求めている人たちに届けなくてはならないということで、色々な支援活動が行われてきました。

そのひとつがこの「東日本大震災支援全国ネットワーク」の動きです（サイトを掲示）。とにかく現地に入りにくいので、出来るだけみんなで情報を共有しあって、支援が届いていない地域が出ないようにすることを第1の目的に立ちあげられました。実は今日この時間に、全国ネットワークの総会が行われています。

このネットワークで具体的に何をしているかというと、この画面の様に、支援に入っている地域を地図の上にプロットし、更にこの詳細画面を開くと、「この避難所で、こういった団体が支援活動をしている」という情報が出てきますが、こうした情報の整理が進められています。このような事が出来るのは、阪

神・淡路大震災から 16 年の間に、それぞれの団体が、時には喧嘩をしながらも、ネットワークを作り、広げてきたことが活かされているからだと思います。このネットワークは、地震が起こってから 3 日後の 3 月 14 日、民間団体の力を結集しようという名古屋の災害 NPO の呼び掛けにこたえた諸団体が、東京に集まり、2 回の会議を経て発足しました。ここでは、セクターを超えた連携も行われています。企業の社会貢献活動、内閣府等の防災に係る省庁の方も参加しておられ、共に活動を進めています。

では、今、ボランティアは、具体的にどんな活動をしているのかについて紹介していきましょう。

まず、被害のひどい被災の中心に、必要な物やサービスを届けて行く活動です。これはなかなか大変な活動ですが、経験のある NGO や市民団体は、既に直後から、被災地に入っています。この時期に被災地に入る事については批判があるかもしれませんが、やはり従前から関係がある人・団体同士が助け合うことは当然のことだとも思います。

そうした活動の中で、ひとつユニークなものを紹介します。物を届ける活動ですが、宮崎の噴火災害の被災地で売れなくなった野菜を募金を募って買い上げ、それを使って宮城の被災地で炊出しをするという活動です。また、被災した人に寄り添う足湯サービスも行われています。足湯サービスとは、湯を張ったたらいに足を浸してもらい、手をマッサージするというものですが、この写真は、現地で足湯をする人に行っていた事前の研修の様子です。東京で行われました。このような事前研修を行って、足湯を現場に届けるという活動も割と早い時期から行われています。

次に、被災地の周辺で出来る・求められている活動をご紹介します。まず災害現場に向かうボランティアの研修です。私もボランティア研修用のテキスト作りに関わっているのですが、今回の災害の特徴を踏まえ、過去のテキストを改訂したり、それをホームページに上げて関係者に伝えていくといった活動をしています。具体的には、このパワーポイントのようなものです。これはまだ案の段階のもので、今日にも内容を確定してホームページに上げると思いますが、こういったかたちで、関係者は朝から晩までメールと電話で研修テキストを作っています。特に、このスライドは必ずテキストに入れるようにしています。今回の災害、初めてボランティア活動をする方も多いのではないかと思います。被災された方へ向き合うに当たって、絶対に必要だと思われる心構えを整理しています。実際、被災地に行くと、どうしても目の前の状況に圧倒され「これは大変だ」とか、避難所に被災者の方が沢山おられると「何と沢山の被災者がいるのだろう」というふうに圧倒されてしまい、とにかく早く作業を

しなければ、前に進めなければ、とってしまうのですが、その前に理解しておかなければいけないことは、ここに書いてあるようなことです。「この景色、あなたはどう呼びますか。私は被災地とは呼びません、故郷、我が町と呼びます」「あなたにとっては瓦礫でも、私にとっては帰るべき我が家なのです」

ボランティアは、目の前のものをゴミだと思ってつい片づけてしまうのですが、「私達にとってはかけがえのない物なのです」という被災者の声を聞かなければいけない。被災者の目線で物事を考えなくてはいけないのです。これを研修では強く訴えるようにしています。さらに、このような見やすいパンフレットを沢山作り、被災地にも届けています。

ところで、今回の災害は、広範囲に亘って被害が出ています。千葉県や茨城県も大きく被災しています。このスライドは千葉県旭市の災害ボランティアセンターの様子です。私も現場でニーズ調査に同行させていただきました。千葉県を被災地として認識していない方もおられるかと思いますが、かなり被災しており、亡くなった方もいらっしゃいます。まずは、東京周辺で研修を受け、千葉のように入りやすい地域からボランティア活動をしていく。そんなことも、できます。

さらに、遠く離れていても出来ることはあります。自分の持っている知恵を出す。人と人を繋いでいく。人の思いを形にして発信する。こんなことならできますね。今、福祉施設にいらっしゃる方を対象に、被災地には行けないけれど、折鶴を折ってもらって、それを被災地に届けようというプロジェクトを企画している団体もあります。このように、遠くにいても出来ることは色々あります。この会場にも学部生のみなさん、それから来年この学部に入學するみなさんがいらっしゃると思います。今、現場に行けなくても、ここで出来ることは色々あります。毎日日記を付けてどんな事が起こっているのかを記録することも非常に重要な事だと思います。私も阪神・淡路大震災が起こった後、出来るだけ見聞きしたことを記録したり、新聞のスクラップをしていましたが、実はこれが、その後の研究活動や社会活動の大きなストックになっています。

阪神間の地域は、過去、災害を経験してきました。直後の対応だけでなく、復旧・復興の段階でどんなことが必要になってくるかも分かっています。現在、一時的に、被災地の外で避難生活をおくられている被災者も沢山いらっしゃいますが、神戸では、過去の知見を活かして、被災者を受け入れ、その生活を支援していこうという動きも起こっています。

そして最後に、これから、将来出来ることについて。社会安全学部の皆さんは、ここで防災や事故に関する様々な事を勉強し、社会に出てからそれを活かして、防災の仕事で活躍される方もおられるでしょうし、また被災地の長期に亘る復興の中で、社会人として貢献出来ることもあると思います。かなり長期

の計画になりますけれども、被災地の外でも出来ること、これから・将来出来ること。こう言ったことをしっかり考えながら、今を過ごしていけたらいいなと思います。以上で私の話を終わらせて頂きます。ご清聴ありがとうございました。